伊野商業高校

「40人学級」が誕生

高教組伊野商業分会
谷内　康浩

伊野商業高校は、私の誕生した年である1963年に開校し、2013年には創立50周年記念式典を開催しました。その前年には、「メディアクリエート科、国際観光科、情報デザイン科、ビジネス会計科、情報処理科」の5科が、全国初と標榜する「キャリアビジネス科」（単位制）4学級に改編されました。5科を4つのコース（ビジネス、ツーリズム、ICT、デザイン）にし、2年次からそれぞれのコース（＋それぞれ2プラン　計8プラン）に分かれる、いわゆる「くくり募集」です。不本意入学を減らす効果をねらったものですが、歴史的に県内では撤退した事例が多いのではないでしょうか。それは、希望する「コース」の人数の偏りで、クラス編成などに支障をきたしたことが主な理由だと思われます。本校でも、当初から第1希望を叶えた関係で、本来2年次からも4学級（コース）であるべきところ、学級の人数の偏りを解消するために5学級にし、異なるコース・プランを組み合わせた学級で対処することもあるなど、毎年、頭を悩ましています。何とか県教委の理解も得られていましたが、来年度は、4学級で行くことになり、40人を超える学級（コース）は、はじめて調整（コース変更）が行われることになり、同時に、来年度は「40人学級」が誕生することになり、戦々恐々としています。また、伊野商はいわゆる「困難校」と言われていますが、「生活指導」よりも「学習指導」や「家庭」に困難を抱える生徒が多数です。数字的にも、学科改編が行われた前後の「入学者数に対する卒業者数」の割合は、大きく変化しておらず、約8割前後で推移しています。キャリアビジネス科4期生からは改善の兆しがみられますが、これは高校入試制度の変更も影響しているのかもしれません。地元新聞の記事になるような取り組みは少ないですが、まずは生徒の進級・卒業、そして進路保障のために、教職員は地道に取り組んでいます。

総実勤務時間の縮減にむけて

高教組委員長　竹島久美

高教組・県教組では、十一月九日に、教職員・福利課長と、十一月十六日に、教育長と賃金・労働条件確定交渉を行いました。

賃金については、県の人事委員会勧告どおりの一点張りで、それでいくと、月例給の引き上げはなく、一時金が0.1月分引き上げ、配偶者の扶養手当が引き下げられ、子どもの扶養手当が引き上げとなります。臨時教職員の待遇改善、妊娠・出産にかかわる制度の周知、介護休暇の申請時の対応などについて取り上げましたが、一番多く時間を費やしたのが、総実勤務時間の短縮について です。

県立も大変ですが、まだ、「高校入試業務や職員会などが勤務時間を超えた場合に、校長が疲労回復措置にふれないのはおかしい」といった声が出てきます。しかし、義務の方は、学テ体制で縛られ、指導案や何やかやの提出を強要され、遅くまで残っているのが普通、勤務時間外の会議もあたりまえといった感じで、感覚がマヒしているように思われます。

少し前までは「多忙感」という言葉を使い、「多忙」とは認めたがらなかった県教委・教育長ですが、「多忙」であるという土台の上で話ができるようにはなってきました。しかし、改善の方策が「業務改善」や「チーム学校」による外部人材の活用などでは、根本的な解決にはなりません。「業務改善」だけではよけい窮屈にもなりかねませんし、外部人材の活用にしても連絡調整が大変になるでしょう。

長時間労働の解消のためには、余計な仕事を減らし、人を増やしてもらうしかないのですが、学校現場の意識が変わらないかぎり難しいとも感じます。

署名や交渉・懇談による県や国への働きかけ、学校現場の合意形成など、できることをこつこつ積み上げていきたいと思います。

「足元からの探求」

もやい塾　学びと交流の旅

山下正寿

もやい塾の地域探究の旅は、済州島・周防大島・祝い島・椨原・本山町などであった。民俗学の津野幸右さんのガイドで、深く楽しく学び、船頭多くて道を間違っても笑ってくれる名ドライバーの本田幸雄さんのお世話になった。その一つ「八重山諸島実感ツアー」を切り取って紹介します。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

5月15日（金）メンバーは13名。早朝6時に幡多ゼミナール館を出発。車、バス、飛行機を乗り継いで石垣島へ。そこから船で西表島へ。

5月16日（土）地域調査派とトレッキング派に分かれて行動したトレッキング派はカヌーで川を上り、ピナイサーラ滝の頂上へ。断崖は少し怖かったが、ながめは雄大で、特にグラデーションになった沖縄の海の色が美しく忘れられないものになった。地域調査派は島の裏側の行き止まりの集落へ、そこで、津野幸右さんの「食わずいも」調査が始まり、ついに群生している浜にたどり着いた。宿舎「マリウド」の夕食後に隣り合わせたおじさんと戦時中の沖縄の話、そして三線の歌声となった。

5月17日（日）西表島から竹富島へ。竹富島は人口350名ほどの小さな島だが、周辺の島々全体を含めて竹富町と呼ばれているので小さくても主要な島だと思った。全国で24番目に「町並み保存地域」に指定された島だ。

夕食の後、この旅の目的のひとつであった「うつぐみ会」の方々と交流した。「うつぐみ会」の会長さんからは竹富島の歴史や現状を話していただいた。参加者の女性3名は戦争中高知県出身の大石隊長と共に島を守ってきた方々で、戦争はつらい体験だったけれど大石隊長が先を見通す力を持っているリーダーで、大石隊の兵士たちや島民に「この戦争はもう長くは持たない、日本は必ず負けるので島民の被害を最小限にくいとめる」という方針を常々語り、島の人々と協力して島を守ることに専念されたそうだ。当時沖縄の人々は「アメリカ兵より日本兵のほうがずっと怖い」と思っていたそうだが竹富島では大石隊と島民の協力で島を守ってきたそうだ。「うつぐみ会」の方々は三線の演奏や沖縄の歌と踊りを披露してくださり、私たちも一緒に楽しく踊りの輪の中に入った。

私たちが宿泊した民宿、内盛荘の「おばあ」は「うつぐみ会」のリーダー的会員でこの日の交流会でももちろん積極的にお話や歌、踊りなどで盛り上げてくださった。まったく年齢を感じさせない前向きな方だった。交流会の後、ほとんどの者が眠った後も津野さんは夜中まで「おばあ」と話し込んでいた。

5月18日（月）船着き場で石垣島行きの船を待っていると、前夜交流した「うつぐみ会」の方2名が見送りに駆けつけてくれた。民宿の「おばあ」を含めて3人で船着場で太鼓をたたいたり、歌ったり踊ったりしてくれた。いつの間にか私たちも加わって、人目も気にせず踊りの輪に入った。嬉しいサプライズだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

山下さんの連載は今回で終了します。山下さんありがとうございました。またいつの日にか連載が再開される日を楽しみに待っています。（ニュース編集部一同）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・